

目指せ! 手術看護のエキスパート!!

54

手術看護のエキスパートが大切にしている10のこと

患者にとっての「よいこと」を考える
倫理的思考とその行動

山下さおり

札幌市病院局 市立札幌病院 手術室, 手術看護認定看護師

POINT

- ▶ もやもやとした気持ちが倫理的な問題であることに気づきましょう。
- ▶ 患者さんにとってなにが「よいこと」なのかを考え行動しましょう。
- ▶ 倫理的問題を声に出して話し合える風土が大切です。

はじめに

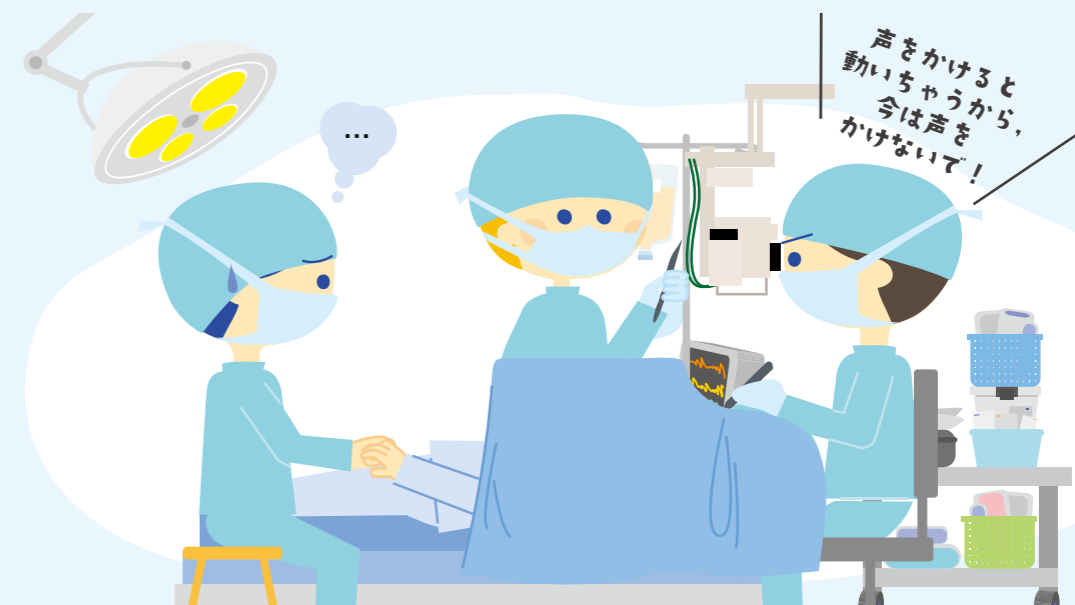
手術室という閉鎖空間で起こる倫理的な問題は、なかなか表面化せず、問題と認識されにくい傾向にあります。手術が行われている現場では、医師の主導のもと、その治療が行われています。そしてその大半は、患者さんが意識のない状況で行われます。そのため、「手術を受ける」とみずから意思決定を行ったはずの患者さんやその家族の尊厳が、いつの間にか軽視されているように感じることは、手術室で働く看護師であれば一度は経験があると思います。日々の業務に追われ、その日に抱えたジレンマを話し合う時間もなく、なんとなくもやもやとした気持ちのまま、また新たなジレンマに悩むことも多くあるでしょう。

そのもやもやとした気持ちが倫理的な問題であると気付くことが大切です。事例を用いて私たちにできることを考えていきましょう。



事例紹介

患者のAさんは70歳女性で、病名は糖尿病網膜症です。手術は球後麻酔と点眼麻酔併用による意識下での硝子体手術で、予定手術時間は1時間半です。医師は1人で朝から白内障手術など、この他に6件の手術を行っており、この患者さんが本日最後の症例です。病態は進行しており、手術時間はすでに2時間半を超えています。麻酔の効果も薄れてきており、患者さんの目が動き出してきています。医師は次第にイライラとした口調で「〇〇さん、目を動かさないでください!」「これじゃあ手術できませんよ!」などと言いはじめました。外回りは手術室経験半年の新人看護師Aさんで、術中に一度患者さんに声をかけましたが、タイミングが悪く、医師から「声をかけると動いちゃうから、今は声をかけないで!」と言われてから患者さんの手を握ることで精いっぱいです。器械出しの手術室経験5年目の看護師Bさんにはなにができるのでしょうか。患者さんの尊厳を守るために私たちはどう考え、行動すべきなのか、Bさんを中心に優先順位も含めて考えてみましょう。



このまま医師がイライラした状況で手術を続行することは、たとえ無事に手術が終了したとしても患者さんにとって「よいこと」ではありません。深く傷ついたり、医師に対して申し訳ないという気持ちが残ったりするかもしれません。今回の事例の患者さんは意識下の手術であり、自己決定が可能な状況です。それでは、どうすることが患者さんにとってより「よいこと」なのか、私たちは専門職者としてなにを根拠に判断すればよいのか、倫理の原則(表1)に照らし合わせて考えます。

無害の原則

この患者さんにとって手術を受けるということは、術後の視力の回復により生活の質が改善されることが期待されます。患者さんの体に傷をつけることは害ではありますが、今後の生活における利益がそれを大きく上回ると考えます。

善行の原則

前述のように手術を受けることはこの患者さんにとっての利益であり、「よいこと=善行」であると考